

ドイツ語構造把握の諸相

—学習の現場ノート— (5) 後編

Aspekte des Begreifens von der Struktur der deutschen Sprache - Anmerkungen an Orten des Lernens - (5) zweiter Teil

宮 永 義 夫
Yoshio MIYANAGA

1. 単音節語抽出の試み

以下にまず、前編にて収集した、小学館『独和大辞典』よりK項、L項の単音節とみなせる語彙を再掲しよう：

Kaag, kaak, kack, Kaff, kahl, Kahm, Kahn, Kai, Kain, Kak, Kalb, kalb, Kalk, kalk, kälk, kalt, kält, kam, Kamm, kämm, Kamp, Kampf, kämpf, kann, Kant, kant, Kap, kapp, karg, kärgst, Karl, Karn, karr, Karst, kart, Kasch, Käsch, kasch, kau, Kauf, kauf, kaum, Kausch, Kautsch, Kauz, Keats, keck, Kees, kehl, kehr, kehrt, keif, Keil, keil, Keim, keim, kein, Keks, Kelch, Kelt, Kempff, kenn, Kerb, Kerf, Kerl, Kern, kern, kess, Ketsch, ketsch, keuch, keusch, Khan, Kib, Kick, kick, Kicks, Kid, Kiek, kiek, kieks, Kiel, Kien, Kies, kies, Kiez, Kif, kiff, kill, Kiln, Kilt, Kimm, Kind, *Kindl, King, Kink, Kinn, Kipf, kipp, Kips, kirn, kirr, Kirsch, Kitsch, Kitt, kitt, Kitz, klack, Klack, klacks, Klacks, klaff, kläff, klag, klamm, Klamm, Klan, klang, Klang, Klapf, kläpf, klapp, klaps, Klaps, klar, Klar, klär, Klas, klatsch, Klatsch, klau, klaub, Klaus, kleb, kleck, Klecks, klecks, Klee, Klei, kleib, Kleid, kleid, klein, Klein, Kleist, klemm, kleng, klick, Klick, klieb, klier, Klietsch, kliff, Kliff, klimm, Klimt, kling, klipp, Klipp, Klips, klirr, klitsch, Klitsch, Klo, klob, klöhn, klomm, Klon, klon, klön, Kloot, klopf, klopp, Klos, Klöß, Kloth, Klotz, klotz, Klub, kluck, Kluft, klüft, klug, klügst, Klump, klump, Klus, Klut, knaatsch, knack, Knack, knacks, Knall, knall, knapp, knaps, knarr, knarz, Knast, Knauf, Knaul, knäul, knautsch, Knecht, knecht, Knef, Kneif, kneif, Kneip, Kneipp, kneipp, kneist, knet, Knick, knick, knicks, Knicks, Knie, knie, Knies, knietsch, kniff, Kniff, Knilch, knill, knipp, knips, Knips, Knirps, knirsch, knitsch, knitz, Knopf, knöpf, Knopp, Knorz, knorz, knot, Knuff, knuff, Knülch, knüll, knüpf, knurr, Knust, Knut, knut, knutsch, Kob, Koch, koch, *Kode, Kog, Kohl, kohl, kok, Koks, kolb, Kolk, kolk, Köln, Kölsch, Köm, komm, könn, Koog, Kopf, kopf, köpf, Kops, Korb, Kord, kör, Kork, kork, Korn, körn, *Korps, kos, Kost, kost, Kot, kotz, Kraal, krach, Krach, krächz, Krad, Kraft, kraft, Kräh, kräh, Kral, krall, Kram, kram, kramm, Krampf, krampf, Kran, kran, krank, kränk, kränkst, Kranz, kränz, Krapp, krass, Kratz, kratz, krau, Kraul, kraul, kraus, Kraus, kraus, Kraut, Krebs, krebs, Kreis, kreisch, kreis, kreiß, krell, Krem, *Kreml, Kren, kreng, Krepp, krepp, kress, Kress, kreuch, Kreuz, kreuz, krieche, Krieg, krieg, Kriek, Kries, Krill, Krim, krimp, Kring, kripp, Krips, Kris, krisch, kroll, krön, Kropf, kröpf, krös, kross, krud, Krug, krumm, krümm, krumpf, Krupp, krütsch, Krux, Kuff, Kuh, kühl, kühn, Kül, Kulm, Kult, Kumm, Kump, Kumpf, Kumst, Kumt, kund, Kunst, Kunz, kupp, Kur, Kür, kur, kür, kürm, kurr, Kurs, Kürsch, kurv, kurz, kürz, kusch, Kuss, küss, kutsch, kutt, Kux, Kwass,

la, lab, lach, Lachs, Lack, lack, lad, lädst, lädt, lag, lahm, Lahn, Lai, Laib, Laich, Lamm, Land, land, länd, lang, läng, längs, längst, Langue, Lapp, läpp, Lar, *large, Lärm, las, lasch, lass, lässt, last, Last, Latsch, latsch, Latz, lau, Laub, Lauch, Lauf, lauf, läufst, läuft, Laum, Laus, lausch, laus, laut, *Lear, leas, leb, Lech, lechz, leck, Leck, Lee, leeg, leer, leg, Lehm, Lehn, lehn, Lehr, lehr, Lei, Leib, leib, Leich, leicht, Leid, Leig, leih, Leik, Leim, leim, Lein,

lein, leis, Leis, leist, leit, Lek, lenk, lenz, Lenz, lern, les, les, letz, letzt, Leu, leucht, Lew, Lex, Lic., licht, Licht, Lid, lieb, Lieb, liebste, lieg, lieh, Liek, lies, Liesch, *Liesl, ließ, liest, Lift, lind, Ling, link, links, Linz, lisch, lischst, lischt, List, Liszt, litt, live, *Livre, Lloyd, Lob, Lob, lobb, lob, Loch, loch, lock, löck, Lodz, Lotsch, log, log, Log, loh, Loh, Lohn, lohn, löhn, Lok, Lolch, Look, Lorch, Lord, Lork, los, Los, losch, lösch, lös, Lost, Lot, lot, löt, lots, Lounge, Lourdes, Loure, *Louvre, Luch, Luchs, Lucht, Lücht, lücht, lud, Luft, luft, lüft, Lug, lug, lüg, Lump, lump, Lunch, Lund, Lünk, Lünt, lunz, Lupf, Lurch, Lust, lüst, lütt, Lutz, Luv, luv, Lux, lynch,

前編にも記してあるが、動詞の場合は1音節となる語幹のみを掲げてある。果たして語幹が語彙として有効であるかは問題がないわけではない。不定詞は、sein と tun を除けば、2音節以上になる。見出し語に忠実に従えば、殆どの動詞は当てはまらない。1音節の見出し語は、十分条件としての1音節語であり、現実性を考えれば、選択肢として否定されるべきではない。しかし、広い可能性を求めて、ここでは動詞について、1音節活用形の代表として語幹を表示してある。語幹そのものが活用形になり得るのは命令形であるが、命令形になり得るかどうかは、意味・用法の確定を待たねばならない。

語幹が1音節である動詞は、音韻的に許されれば、すなわち口調のeなどを必要としなければ、3人称単数及び2人称複数数の-t、2人称単数数の-stが接尾辞として付加され得る。これも、例えば非人称動詞であれば-stの可能性は消えるように見える。上に挙げたものの中には含まれないが、分かりやすい例として *schneien* を取り上げる。非人称動詞である *schneien* は、現在形においては *schneit* の形を取ることがほぼ定められているとよい。従って、*schneit* を1音節語彙として登録すればよい、というのが一つの立場である。しかし *schneien* は非人称に止まるものではなく、比喩的な用法では、*Die Blumenblätter schneien*. 「花びらが舞い散る」のように使用される。1音節の活用形、*schneist* も排除できない。非人称はあくまでも動詞の用法であって、いかなる非人称動詞も、人称変化の制約はないのである。一方で、余りにも希なケースや、その意味素性によって、不可能な人称が指定される可能性もある。語幹が語彙になり得る代表例は命令形であるが、話法の助動詞のように命令形の欠如を特徴とするものもある。即ちここでは、音韻並びに文字の並びが問題としているので、可能かもしれない形態を排除せず、なおかつ不安定な欠如条件に対応するための抽象形として語幹を掲出している。

動詞に比べると形容詞は把握が容易である。語幹を基本形として登録することが通常であるからである。しかし、問題なしとはしない。付加語的用法に限るものが存在するからである。付加語的用法ならば、性数格変化語尾が存在し、1音節ではあり得ない。命令形がなければ、語彙として使用されない動詞の語幹と同じ事態である。音節は子音+母音を基本とする。母音語尾の付加は音韻上の構造と形態構造の齟齬を生じる。語幹は理念形であるが、変化語尾の集合体が一概念となれば、語幹も語彙として意識される。例えば、*gute*、*schöne* などは、音韻的には *gu-te*、*schö-ne* と分解される。*-e* が語彙横断的に格変化語尾、あるいは、そのような何らかの意味づけに至らないまでも、同じ性質を持つものとして意識されれば、*gut-e*、*schön-e* という構造が浮上し、ここで初めて、*gut*、*schön* が1音節の語彙となることが出来る。付加語用法限定の形容詞はこのような操作を必要とし、存在は明快なものではない。

更に形容詞には比較級、最上級があり、最上級は *-st* で1音節である可能性がある。1音節最上級は最小音節ユニットとして登録されて然るべきであるが、これも同様の問題が生じる。最上級の欠けた形容詞が存在する。意味上、最上級あるいは比較変化そのものが不可能であるものがあり、そのようなものとして一般には辞書登録されている。ところがこのようなものも、比喩的表現を許容すれば、絶対不可能であるかどうかは不確定である。

一般の述語用法、副詞用法を備える1音節形容詞は、当然登録される。付加語用法のみの形容詞は、形容詞格語尾の付加という認識があり、語幹が1音節であれば、登録されていておかしくない。最上級の存在の有無は保証されない。したがって、最上級形を同じレベルで登録することは出来ないが、排除はしない。動詞も形容詞も、そのような規準を設けることによって、語幹を登録することにした。1音節内に止まれる動詞・形容詞の変化語尾は、集約すれば、-st、-tになる。これら、非常に多用される語尾は、動詞・形容詞の変化形によってのみ実現されるということはなさそうである。すなわち、動詞、形容詞の変化をまたなくとも、他の語彙によって、当該の音韻は実現されているという期待がある。1音節の動詞・形容詞の語幹は、場合によっては、これに-st、-tが付加しうるが、他の条件によって、それが無い場合も留保するという意味合いを持っている。

2. K、L項で何が見えるのか

1音節語の抽出は、実際に自立している語彙の最小単位を列挙することを意味している。これがドイツ語の根本を作っていると言える。最小のデジタル的単位は文字であって、そこに非意味的な音韻が接着していると言える。文字も、字形のようなレベルであると、アナログ的に連続し、分節は困難であるが、アルファベットの区別といった十分に抽象的なレベルに上げれば最も明快な分節が可能である。

音韻は文字に比べれば、領域として広がりを持つものであるが、子音は比較的境界がはっきりしており、デジタル的である。母音はさらに連続性が高く、母音として1つのものとして扱う可能性もある。動詞の活用変化の中心は母音交代であることを考えると、母音の連続性を前提として、子音の枠骨格の共通性のみによって、それらの関連を言うことができる。例えば sprechen の語幹 *sprech* は *spr#ch* の1変種であり、一般に見られる形としては、この他に、*sprach*、*sprich*、*sproch*、*spruch* がある。これらを容易に1音節語彙の中に付け加えることが出来るかは問題である。例えば *sproch* は、まずは *gesprochen* の語幹であり、これがどのようにして、*spr#ch* の一員であるのかを言うことは相当複雑なプロセスを必要とする。しかし、経験的に関連性を承知している *sprechen* と *gesprochen* を繋ぐのは *spr#ch* を媒介とすることが最も安易ではないかと思われる。

子音の枠骨格と言えるものは、音節頭と音節末に分かれる。母音を中に挟むため、閉じた状態から開いた状態になるのが音節頭であり、その逆のプロセスを辿るのが音節末である。即ち、音節全体では、破裂音<摩擦音<鳴音<母音>摩擦音>破裂音という構造を持つ。破裂音であるK項の場合は音節頭で破裂音<摩擦音<鳴音のセットが可能であり、鳴音であるL項の場合は、次に母音が来る事が予想される。その母音に傾向なり、選択的な制約が存在するかが興味深い所である。音節末には順序の制約はあるものの、音節頭との連関はないものとするのが妥当な所であるが、可能性が満遍なく実現しているわけではない。単なる偶然と考えることもできるが、まさにそのような欠如がドイツ語の特性なのであり、本質をなすものである。

ドイツ語の単独の母音字は *y* とウムラウトを加えて9文字であり、代表的な二重母音は3種であるが、その表記については安定しないこともある。一般的な表記以外は2音節である可能性があり、例えば *ao* や、半母音化の *ia* などは二重母音として扱うのが妥当である。

k の単独音には、黙字の *h* を伴うなどのバリエーションが考えられるが、ここでは *Khan* 1語が挙げられた。*k* 及び *kh* の後の母音は記載順に *aa a ah ai ä au ea e ee eh ei eu i ie o oh ö oo u uh üh ü* がある。この内 *ea* は固有名詞 *Keats* であるから、発音は *i* 系統になる。

音節頭の k との子音組み合わせは kl kn kr kw がある。それぞれの母音分布を見ると、kl においては a ä au e ee ei i ie o ö oo u ü。kn においては aa a au äu e ei i ie o ö u ü。kr においては aa a ä au e ei eu ie o ö u ü。kw においては Kwass 1 語のみの掲載であるので、a のみである。

鳴音(側音)である l の場合は、母音に接触している必要があるため、次位は母音であることが期待される。それは間違いないが、語彙としては固有名としての Lloyd が含まれている。ll はドイツ語に於いては単純な l と区別が出来ないから、単純な l に含まれるものとして扱う。音節頭の l に従う母音を列挙すれば、a ä ah ai au äu ea(/i/) e ee eh ei i o ö ou(/au/) ou(/u/) u ü y である。

どの音節頭音の場合も、接続する母音は、ほぼ網羅されている。所々に見られる変異、欠如には本源的な条件はないものと思われる。しかしながら、事実として偏りが存在することがドイツ語の特徴なのであり、このことがドイツ語をそのようなものとして作り上げている。

一方、音節末の音結合は、記載順に列挙すると、K 項においては、g k ck ff l m n lb lk lt mm mp mpf nn nt p pp rg rl rgst m rr rst rt sch f z ts s r ll ln nd ndl ng nk pf ps rsch tsch tt tz cks b d st mt t ß th ft gst rz cht lch ch de (/t/) rk rps(/r/) chz d kst nz ss ml rs rv x。

L 項においては、b ch chs ck d dst dt g m n mm nd ng ngs ngst ngue(/ng/) pp r rge(/rʒ/) s sch ss st tsch tz f fst ft t cht k nk nz nd tt szt ve(/f/) vre(/vr/) lch rch rd rk mp nch(/ntʃ/) v x。

これらを任意に組み合わせる試みは、ドイツ語の音韻可能性を探ることを意味する。実際には、例えば、最初の kaa の組み合わせであれば、Kaag と kaak しか抽出されていないのであるから、非常に個別であり、先にも触れたように、この制約が、ドイツ語の音韻と語彙を繋ぐ特性を作り上げているのである。この度は、K 項と L 項を抽出した例示に止まっているが、稿を改めて、考察を進めていくものとなろう。

註

1) 前編 宮永義夫「ドイツ語構造把握の諸相—学習の現場ノート (4)」、『山梨大学教育人間科学部紀要』, 第14巻, 2012, pp249-255.

2) 前編 国松孝二他編, 『独和大辞典 第2版』. 小学館, 2000, pp1212-1463.